

面接は三回行なった。

### 〔経 過〕

ADLは、退院時独自可能で、経過中著明な変化は見られないが、次第に運転中に肩の痛み、下肢倦怠感を訴え、病状は緩満でありながらも進行しているようである。

乗車時間は、平均30分から60分位で、目的は主に買物又は、ドライブなどで、遠出はしてないようです。免許取得前は、数えるほどしかなかった外出が多くなり、生活全体に変化を来したと思われる。

精神面では、20才の年令的情緒不安定から、家族関係共に、人との接触など逃避の傾向が見られる。援助として、友の会、筋ジス協会などへの参加を積極的に働きかけて行きたい。

短期間の調査で、全体的に自立した変化は見られなかったが、進行に伴う変形及び筋力低下は明らかであり、自宅療養又は入院生活を送らなければならない前に、可能な限りの生活が出来るための運転。つまり、免許取得は意義あったと思う。

本患者は、運転適性に欠ける時点で、免許返上を自覚しているが、その際患者自身どう対処して行くか、又自動車運転することが、筋ジス患者に与える影響を見て行きたいと思う。

## 5. 進行性筋ジストロフィーの思春期、青年期患者とその生活 (特に作業療法棟のかかわりについて)

国立療養所西別府病院

石川 早苗 田北 多紀代

小畑 千代子

### 〔目 的〕

作業療法棟設立を機会に、日常生活の一部として、より有意義な病院生活が送れるような援助をする為に以下の方法により実施したのでその結果について報告する。

### 〔対象及び方法〕

当院筋ジス患者は、71名で卒業生13名、高等部3、2、1年の19名を対象とした。方法は、1. 患者の病院生活に対するアンケートによる意識調査と個人面接。2. プロセスレコードによる患者の社会性や日常生活の観察。以上の結果をもとに看護婦側からの日常生活の援助について検討した。

〔結果〕

1) 卒業生作業棟使用状況

図1

対象卒業生13名

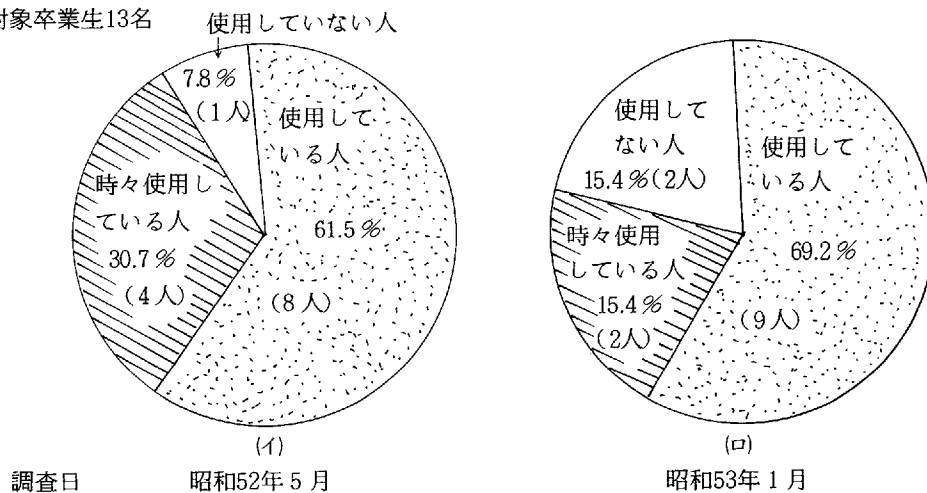


図2 対象卒業生13名 2) 作業棟使用による意欲の変化

調査日	変化があった人	変化がなかった人	無解答
昭和52年5月	38.5% (5人)	46.1% (6人)	15.4% (2人)
昭和53年1月	46.1% (6人)	46.1% (6人)	7.8% (1人)

1) 図1は、ほとんどが作業棟を利用している。

2) 図2は、前回の調査より「作業棟使用による意欲の変化」があった人1名増。

① 時間の制限なく使用したい。

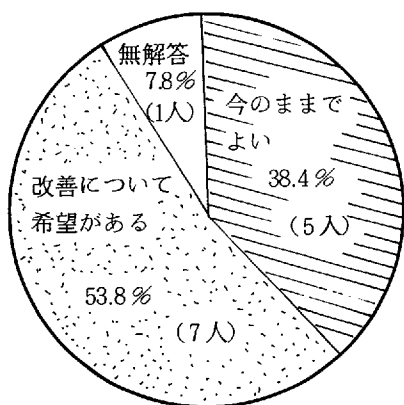
② 多種の指導者がほしい。などの意欲がみられる。

3) 図3に示すように「日課の改善を希望する人」が53.8%と多い。表1のように患者の意見とナースの援助について検討した。

青年期患者の生活環境の拡充は重要な問題である。有意義な生活が送れるようにするため作業棟を活用したい。上記の結果をもとに作業棟を有効に利用出来るようナース側から日常生活の援助について次のようにまとめる。

図3

3) 日課の改善について



対象卒業生13名

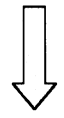
調査日  
昭和52年5月

表1

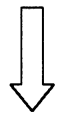
日課の改善を希望する人の意見	ナースの意見
1. 病棟内にとざされがちとなるので外に出してほしい。	暖かい日やその日のスタッフによってスケジュールを組み車椅子に乗せる。
2. 散歩の時間をもうけてほしい。	年々電動車椅子を増す。 散歩の時間をスケジュール化する。
3. 消灯時刻が早い。 (現在21時消灯)	健康管理上変更しない。

- ① 計画性をもって、作業棟での時間が生活のリズムとなるようにする。
- ② ナースも係をきめ一緒に行動する。(作業に参加する)
- ③ 他の病棟行事のかみあいや病状上許す限り援助する。

障害度の進行に伴い、父兄の協力と学校側やボランティアの協力をもとめて、具体的なものとして援助して行く。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

作業療法棟設立を機会に、日常生活の一部として、より有意義な病院生活が送れるような援助をする為に以下の方法により実施したのでその結果について報告する。